国際開発救援財団・ワールド・ビジョン・ジャパン合同事業報告会

能登半島・珠洲市長、事業地を視察した法人賛助会員9社17名が登壇しました!

10月17日、国際開発救援財団(以下、FIDR)・ワールド・ビジョン・ジャパン(以下、WVJ)合同事業報告会を、山崎製パン総合クリエイションセンター(千葉県市川市)において開催しました。法人賛助会員を中心とする支援者約260名にご来場いただき、両団体より、事業活動とその成果をご報告しました。
FIDRは、令和6年能登半島地震緊急復興支援活動について石川県珠洲市の泉谷満寿裕市長をお招きしてご報告しました。さらに、カンボジア・ベトナムにおける事業活動の成果と意義について、昨年9月に現地を視察した法人賛助会員9社17名とともにお話ししました。今号ではFIDRからの発表内容を詳細にお伝えいたします。

飯島理事長より日頃の感謝とご挨拶

FIDR 飯島延浩理事長

日頃はFIDR並びにWVJに格別のご支援、ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

現在の不安定な社会情勢は国内でもFIDRの支援地でも同様であり、円安も進んでおります。今後もFIDRが継続して安定的に事業を実施し、さらにその働きを効率的に発展させていくために、法人賛助会員の皆様に会費口数の増口をお願いさせていただき、120社より2,890万円分の増口ご支援をいただきました。改めまして増口いただきました法人賛助会員の皆様に、また、継続してご支援くださっている皆様にも心より感謝申し上げます。

世界各地で大規模な自然災害が増え、国内でも昨年1月に令和6年能登半島地震が発生しました。今現在も仮設住宅に住んでいる方が多くいらっしゃいます。FIDRでは地震発生後皆様に募金を呼び掛けたところ、6,000万円を超える寄付をいただきました。改めて、心より感謝申し上げます。

今年、財団設立35周年を迎えるにあたり、FIDRは、「Our Mission」「My Mission」をもって新たな種蒔きを行うことで、着実な前進を期してまいります。さらに、和の精神を重んじ我々を応援くださる皆様の期待に応えるべく、覚悟を持って、立ち止まることなく、心を込めた事業活動を推し進めてまいります。

令和6年能登半島地震緊急・復興支援

FIDRは、令和6年1月1日に能登半島地震が発災してから間もなく現地での調査を開始し、時間を経るとともに変化するニーズに合わせた支援をおこなっています。

今回は、中でも被害が甚大であった石川県珠洲市の市長、泉谷満寿裕氏がご登壇くださり、珠洲市への寄付や募金に対する感謝を述べられた後、被害の様相、現在の状況、そして今後の復興計画についてお話しくださいました。

「1月1日の大地震が発生した時、私は自宅におりましたが、これまでに経験したことのないとてつもない揺れを感じました。あらゆるものが破壊されてしまう激震でありました。すぐさま防災服に着替え外に出ようと思ったものの、地面が沈下し、家が完全に歪んでしまっていたのですぐには外に出られない状況でした。ようやく外に出ると、道路の向かい側の建物の外壁は崩れ落ち、電柱は大きく傾いていました。数軒隣の家は完全に倒壊して、屋根が道路を塞いでいるという状況でしたし、道路にも段差が生じています。排水路も大きく壊れていました。4、5メートルの津波も生じ、発災の30分後くらいに津波はピークに達しました。

住宅は全体の3割ほどが全壊、全壊を含む半壊以上の世帯は約7割と、非常に厳しい状況となりました。また、断水が長期化し、通水開始に70日間、ほぼ解消するまでに5ヶ月ほどかかったことで、避難生活が非常に困難なものになりました。さらに避難所は想定人数の3～4倍の方々が避難された場所もあったため、インフルエンザや新型コロナの感染拡大が懸念されていました。そのような状況で、FIDRより空気清浄機を寄贈いただき、効果的な感染対策となりました。

子どもたちはと言いますと、1月11日から多くの学校が授業を再開し、1月22日までにすべての学校が授業を再開しました。しかし、断水の影響で学校の調理施設が使用できなかったため、FIDRより学校給食の代わりとなるお弁当を毎日約500食ずつ、合計で14,000食を支援いただきました。珠洲市は、子どもたち、ひいては学校の存在は地域の活性化に必要であるという考えに基づき、統廃合はおこなってきませんでした。しかしながら、現在、児童生徒数は(発災前と比べ)27%減少しているため、複数の学校が合同で授業を行う機会が増えています。その中で、FIDRからマイクロバス2台を寄贈いただき、運動会といった学校行事などで子どもたちが集まる際に効果的に活用させていただいております。部活動も、授業と同様に合同でおこなうようになったため、新しいユニフォームや用具を提供いただきました。子どもたちは『珠洲市の宝』であり、『希望』であります。児童生徒が明るく元気で学校に通えるようにご支援を賜っているのは、本当にありがたい限りです。

珠洲市長・泉谷満寿裕氏

人口は発災前と比べて9月末時点でおよそ2,000人、全体の約15.4%減少している非常に厳しい状況でございますが、災いを転じてまいりたい、という思いで、地域の方々とともに、新たな街の形について議論を重ねています。珠洲市の復興に向けては、里山里海の営みの再生をベースにして、アートや先駆的な技術を取り入れ、より魅力ある最先端の復興を成し遂げてまいります。

今後とも、皆様のご支援を賜りますよう、心からお願い申し上げます。」

令和6年能登半島地震に対する支援を報告するFIDR 職員

このような復興計画への支援として、今年度は地域クラブへの用具一式やユニフォーム支援、小・中学校へのICT機材支援をおこなった他、元・東京交響楽団コンサートマスターである大谷康子さんによる演奏会を予定しています。

法人賛助会員の社員による事業視察報告

はじめに

発表：清水さん、濵口さん

2024年9月3日～11日に、法人賛助会員を代表して9社より私たち17名の社員が、カンボジア・ベトナムの事業を視察しました。

当視察の目的は、「賛助会員の寄付や会費がどのように活かされ、現地で事業が実施されているのかを知る」「現地の歴史的背景を学び、現在の発展状況を把握する」「現地で働くスタッフの人柄を、直接話して知る」の3点です。これらの目的に基づく視察の結果を、「納得」「発見」「感動」というキーワードに集約して発表します。

納得　支援が現地で役に立っていると実感

発表：桑原さん、立花さん、吉田さん、西岡さん、山口さん

FIDRは現地の課題に即応し、現地住民が自立して生活できる力を養う支援をおこなっていました。その結果、住民から受け入れられ、感謝されるというサイクルが確立しているのを目の当たりにし、事業内容に深い納得感を得ることができました。

例えば、小・中・高校生への公教育に初めて栄養教育を導入するカンボジア栄養教育普及プロジェクトは、FIDRが直接子どもたちに教えるのではなく、教育省の職員が教員に教え方を指導していました。FIDRは、現地の教育者の育成を通じて彼らの意識改革と自立を促す、「一緒につくり上げる」支援をしており、各学校ともとても良い関係を築けていると感じました。

また、カンボジアの農村で法人賛助会員のニッシントーア・岩尾㈱と行っている、地元産食材を使ったふりかけ開発は、住民の栄養補助となるだけでなく、販売による収入も期待されていました。事業が地域に貢献していることにしっかり納得することができました。

ソントン食品㈱の山口さんは、ベトナムで自社が支援した栄養指導車（キッチンカー）を初めて見た印象を、こう語られました。

車に設置した炊飯器を使っておこなう調理実習を見学し、自分たちが営業活動で得た利益が、ベトナムの子どもたちの栄養改善や世界の人々の食文化に貢献できていると感じました。

発見　「遠いが近い」になり「幸せとはなにか」考えた

発表：中村さん、橋本さん、清水さん、西口さん、大塚さん

視察を通じて、カンボジア・ベトナム両国の歴史と文化に触れ、現地の方々と交流したことで、私たちの意識や価値観は変わりました。

アンコール遺跡群では、約千年前に築かれた遺跡を目の当たりにし、長大な時間スケールの中では、私たちが日頃抱えている悩みや焦りは取るに足りないものだと感じさせられました。

両国には、美しい歴史・文化だけでなく、内紛や戦争に関する辛い歴史もあります。カンボジアにあるトゥールスレン博物館は、かつて学校だった建物がポル・ポト政権時代に独房や拷問部屋として使われ、現在はその歴史を残す博物館となっています。壁一面に並んだ収監者の顔写真から「生きたい」という気持ちがひしひしと伝わってきて、胸が締め付けられました。同時に、暗い過去を封じ込めず、未来への警鐘として残そうとしている姿勢に、深い尊敬を覚えました。

カンボジアやベトナムは遠い国だと思っていましたが、現地の子どもたちに会い、FIDRスタッフの働きを見ることで「私たちのすぐ隣にある現実」と感じることができました。また、辛く悲しい歴史を学ぶ中で「同じことが日本で起きたら」と自分事として想像しました。

事業地に住む方々は、物質的に豊かであるとはいいがたい暮らしをしていましたが、彼らの笑顔は驚くほど輝き、幸せそのものに感じられました。幸せとは、物の多さではなく、人とのつながりや日々の恵みに感謝する心から生じるのではないでしょうか。

感動　現地のスタッフの熱い志

発表：諏訪部さん、池さん

現地で目にしたFIDRスタッフの姿に感動を覚えました。皆さん、笑顔が本当に素晴らしく、仕事に対する熱意の高さに驚かされました。カンボジアで出会ったあるスタッフは「自分が生まれ育った地域をより良くする」という目標を語ってくれました。彼が「FIDRは他の団体と違い、みんなが一つの目標に向かって動くから楽しい」と話すのを見て、所長を中心に信頼関係を築き、チーム一体となって働いているのだと感じました。

栄養教育普及プロジェクトのモデル校を訪れた際には、100名を超える子どもたちが拍手で温かく迎えてくれ、感動しました。心を開いて欲しくて、子どもたちと自撮りを試みたところ、皆笑顔で集まってくれ、言葉の壁を越えたつながりを実感できました。子どもたちの笑顔の背景にあったのは、スタッフの「子どもたちを助けたい」という情熱です。その情熱は、教員の熱心な授業への取り組みにつながっていました。授業を受ける子どもたちの真剣な眼差しから、FIDRの活動の意義を感じ取ることができると思います。

Let's FIDR！～一緒に未来をつくろう～

発表：石坂さん、室田さん、髙橋さん

視察を通して、FIDRが健康や栄養といった生活の基盤を支える支援だけでなく、現地の方々が自立して生活できる産業を興すという踏み込んだ支援もおこなっている、ということを深く理解することができました。

さらに、FIDRと現地の方々は支援する側・される側という関係ではなく、共に学びあい、一緒に未来をつくる仲間だということが分かりました。

FIDRと私たち賛助会員との関係も同様で、一心同体なのです。FIDRは私たちの一部であり、私たちもFIDRの一部です。ですから、私たちにとってFIDRはもはや名詞ではなく、動詞。FIDRに参加しようではなく、FIDRしよう！なのです。それを英語で言うと「Let's FIDR ！」です。

この言葉を胸に、私たちは他の賛助会員の皆さまとともに、次の大きな一歩を踏み出したいと思います。

Let's FIDR ！！！

FIDR支援事業部長・小山より ～視察していただく意義～

カンボジアもベトナムも、FIDRが支援を始めた30余年前には、病院の施設は充実しておらず、子どもたちの学校も校舎がないという状況でした。30年以上の長い時間をかけて事業を続け、ようやく今回視察いただいたような状況となりました。長期的な活動ができ、その中で確実に変化を起こすことができるのは、ひとえに支援してくださる皆さまのおかげに他なりません。事業地に住む方々も、日本に住む私たちや支援してくださる皆さまに心を寄せて、一緒になって世の中を良くしていこうという姿勢になっていると感じています。FIDRは今後も、ぜひ支援してくださる皆さまとともに支援事業を広げていきたいと思っています。

発表の最後には、登壇した17名全員で"Let's FIDR"と声を上げ、FIDRの活動に対する応援と団結を示してくださいました。（表紙参照）

報告会の会場ロビーでは、FIDR海外事務所の活動を紹介する最新動画を上映しました。FIDR NEWSをご覧の皆さまも、ぜひご覧ください！

※発表者のお名前は順不同、役職を省略して掲載しております。